九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

語りから見る原風景（３）：共同の語り・共同の原風景

呉，宣児
日本学術振興会外国人特別研究員

南，博文
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/879

出版情報：九州大学心理学研究. 3, pp.175-186, 2002-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2002, Vol.3, 175-186

語りから見る原風景（3）
－共同の語り・共同の原風景－

呉　宣児　日本学術振興会外国人特別研究員
南　博文　九州大学大学院人間環境学研究院

A Study of "GENFUKEI (Original-scape)" as Narrtives
－ The Shared GENFUKEI of Members of a Local Community—

Oh Seon-Ah *(JSPS foreign fellow)*
Minami Hirofumi *(Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University)*

The current research is an attempt to conceptualize and define the structure of "Genfukei" in order to explain how it forms and what is common among individuals of a particular group. Field interviews were conducted on Jeju Island, South Korea. Four groups of 4 to 6 adults particpated. Results of the analyses of each group narrative revealed 4 types of narrative participation: 1) new topic introduction type, 2) elaborate explanation type, 3) receptive reaction type, and 4) acceptive questioning type. Moreover, we found that by focusing on the elaborate explanation type of narrative participation we could see how "the shared Genfukei" may form through a gradual shift from the use of the world "I" to "we" during a narrative. It is suggested that this method of investigation and analysis is useful when attempting to understand how a community is formed.

Keywords: "Genfukei" (Original-scape), group narrative, the shared Genfukei, elaborate explanation type.

問　題

「・・・夜にも行ってみようと思って，友たち３人で沙羅峰に行ったのね，大きな声で歌をうたいながら，ふふふ，実はみんな心の中では怖かったのに，だれも怖くないふりをしたわけ。共同墓地も通過しなければいけないし，それも夜だよ夜・・・」

「・・・一番記憶に残るのは僕が幼いとき住んでいたところ，海の風景だな。・・・朝起きたら，深い霧のなかから霧を知らせる牛の鳴き声，ブーブーと霧笛の警報を鳴らす音を聞いたんだ。その音を聞きながらなにかうら寂しい気がしたな。・・・」

「・・・まだ小さいときはウヨンパッ（家の敷地内の畑）で土団子作りをしていたね。・・・また学校に行ってもその当時は仕事が多かったな。草刈をして学校に持って行ったり，ハンラ山に薪とりに行ったり・・・」

以上は，知り合いたちと話したとき聞いたことである。何気なく話している彼ら・彼女らの顔には，なつかしさ，喜び，わくわく感，惜しみ，悲しさ，願望など表情豊かさがあった。個々人の心の奥深くに広がる世界があるようだった。

上述のような日常生活のなかでみられる話は，「思い出話」とか「エピソード記憶」という言葉ででもアプローチできるだろう。あえて，本研究では，「原風景」という言葉でアプローチしている。それは，「風景」という言葉で表現されているようにわれわれの生活における空間・風景・場所という物理的側面も含めて人々とその生活を理解し意味付けしようとする立場にあるからである。

Proshansky&Fabin（1987）は，発達心理学の領域では自己アイデンティティ形成における物理的環境の役割が無視されてきたと指摘した。どういう人間であるかを定義するときは，物理的環境に対する認識も含むべきだと示し，自己アイデンティティの下部として場所アイデンティティ（place identity）概念を提示した。場所アイデンティティとは人々が毎日の生活を送る物理的世界と関連する考え，記憶，信念，価値観，アイデアを言い，私はどこの出身でどこで生活をしてきたかということと分離して考えることができないという意味として捉えられる。

本研究は，「語りから見る原風景」と題する呉・南（1998，2000）の一連の研究の続きである。「語りから見る原風景（１）」では個人語りを用いて，原風景を説明するための概念をつくり，その概念間の関係である構造の検討を行った。「語りから見る原風景（２）」では調査対象地域である韓国済州島の空間的特性を原風景と関連づけて分析を行った。従って，原風景に関する研究の流れ，および原風景の個人性・空間的特性などは呉・南（1998，1999，2000）を参照してほしい。

個々人を理解する手がかりという文脈ならば個人の原風景として取り上げられるが，文化・共同体を理解する手がかり，または，まちづくりや地域づくり，地域開発など，実際の空間・風景・場所と関わるときは，地域共

同体のなかで個人を超えて，個人間・グループ間で原風景を捉え，「共同の原風景」を問うことになる。

それでは「共同の原風景」をどう捉えるか。奥野（1972)は，「個人的固有の原風景」と「その民族や風土ごとにある共通した原風景」が考えられると示し，高橋（1978）は「万人に共有されながら，しかもその個人性・能動性が強調される」と述べ，厳密に個人的であるとした。勝原（1979，1986)は，「原風景には純粋個人のもののほかに，国民的原風景とも呼ばれるべきものが，重層的に共存しているのではないか」と述べ，農村の風景を日本人の最も重要な風景としている。

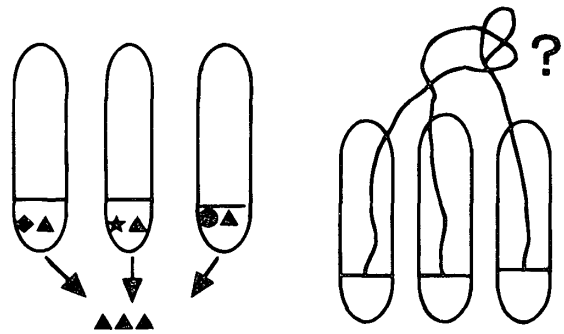
しかし，上述したような見方は提示されたものの，これまで原風景の個人性・共同性についてのより詳しい説明や実証的作業は見られない。また，今までの実証研究では，個人性・共同性という区別はせず，個々人にインタビュー調査，作文・質問紙調査，絵地図調査などが行われ，一般的な傾向として提示されているが，「共同性」自体を捉えた実証研究はないといえる。

以上を踏まえ，本研究においては，原風景の共同性に焦点をあてることにする。その際，原風景は，日常生活の文脈のなかで語りに現れるという立場（呉，2001，2000；呉・南1998）をもって，共同で語り合うなかに原風景の共同性が現れるのか，たち現れてくる原風景の共同性をどのように捉えるかについて探索的に研究を行う。

つまり，原風景は過去に終わった固定的な空間・風景・場所としてではなく，現在のリアリティの中で再構成・体験され，意味付けられるものとして捉える。その意味で，想起・語り・ライフストーリーの研究の視点（野中・桜井，1995；桜井1986；佐々木，1992；やまだ，1999，2000）と同じ立場を採る。ただし，本研究で想起の語りとは個人一人だけの想起や調査者と調査協力者という1対1の関係における語り・想起ではなく，同じ地域に住んでいる複数人の人々が居合わせている場面における想起・語りが中心である。

今までのライフストーリー研究においては，ライフストーリー・物語りは聞き手と語り手の共同行為によって生成されるとしているが，主に焦点を当てているところは「個人」「自己」「自己物語り」である場合が多いと思われる。本研究では先述したように，「自己」に着目するのではなく，原風景という切り口からその共同性に着目する。

ここで原風景の共同性を捉える視点をもう少し示しておく。まずは原風景を直接体験し想起可能な範囲で，意識的にせよでないにせよ日常生活の中の語りに現れるものとして共同性を捉えることにする。その際，ある地域の人々のなかで共通する最大公約数のようなもの（Figure 1のa）を共同性に捉えるのではなく，共同で語り合う場で共有認識しながら生成されてくるもの（Figure 1のb）を共同性として捉える。



(a) 個々人のデータを集めて共通性を見る　(b) 体験を基に今ここで想起し語る中で現れる

Figure 1　共同性を捉える立場

本研究において調査方法として用いる共同語りは，同じ地域に住んでいる人々の生活文脈で複数人が居合わせて語り合うことがみられる場面，例えば，町のある場所に数人が居合わせているとき，正月などの家族の再会のとき，地域の行事をみんなで準備するとき，祭祀のときなどを想定した場面である。このような同じ地域の人々が同じ時間同じ場所に居合わせて共同で語り合うという調査を通して，以下の2点をを明らかにすることを本研究の目的とする。

1）共同語りの中で原風景の共同性がたち現れるのか，原風景の共同性は何を根拠に捉え，どう説明できるかの説明概念を作り，その概念を用いて，共同性の生成のプロセスについて検討する。

2）1）で得られた説明概念や共同性の生成プロセスの具体的な内容を検討することにより，生成された「共同性」は具体的にどんな内容なのかを記述する。つまり，調査地域に住んでいる人々の「原風景の共同性」として提示できる内容は何なのかを検討する。

なお，本研究はデータを基に説明概念を産出し，概念間の関係を探りながらその構造を明らかにする仮説理論生成型の研究（箕浦，1999；佐藤，1992；やまだ，1997；山田，1986）として位置付ける。

方　法

現在韓国済州道に住んでいる人々の4つのグループ（家族，友達夫婦，同じマンションの主婦，訪問販売員）を対象に調査を行ったが，その中で最も語り合いが活発だった1つのグループ（家族）の語りを本研究の分析データにした。調査協力者が住んでいる済州道は韓国の南端にある島である。済州道に関する詳細は呉（2001）を参照されたい。

調査の手続きと調査場面の状況

調査年月日は1999年２月23日である。共同語りに参加した者は，調査者（第１著者）を含む兄弟関係・夫婦関係にある家族グループ５人である。調査者以外は全員40歳代であり，1950年代から1960年代の韓国の時代的背景のなかで幼児期・児童期・青年期を過ごしている。共同語りに参加した各参加者のプロフィールと参加者間の関係をTable 1に示す。

調査協力者の一人である錦（43才）の家で調査を行った。拡大家族の食事の日，一部の家族が帰ったあと大人５人はキッチンでコーヒーを飲みながら雑談をしていた。ここで調査者は，研究のための協力を依頼し，子ども時代の話をしてもらい，許可を得てカセットテープに録音した。録音は１時間で終わったが，家族の話は続けられた。調査者は，参加できるところは無理なく参加するように心がけた。

分析手順

①録音された順番通りの共同語りをそのまま全部１次逐語録として書き起こした。②共同語りの逐語録の作成中に，個人語り（呉，2000；呉・南，1998）とは異なると感じた点をメモとして書き留めた。③ある話題の始まりから次の話題に変わる時までのまとまりを１つの分析ユニットにし，全データから31個のユニットを抽出した。④各ユニットごとに発話の順番，発話者，内容が分かるように逐語録を編集して２次逐語録を作成したあと，各ユニットごとに内容の要約になる10字程度の１行題目をつけた。⑤２次逐語録を用いて，個人ごとの発話を中心に検討した結果，主に話題を提供する人，提供された話題に説明を付け加える人，わからない地名や場所の位置や言葉などについて何度も質問する人，また語りを聞きながらうなずいたり，驚いたりしながら自分の感想を言う人など，それぞれの特性があることが分かった。⑥⑤の気づきから，発話の内容と発話者との関係を検討し，共同語りに参加する典型的タイプがあることを見いだした。これら典型的参加タイプをそれぞれ「話題提供」，「敷衍（ふえん）説明」，「受け入れ反応」，「確認転回質問」と命名し，それぞれの特徴を記述した。⑦「話題提供－敷衍説明」の語りに，いくつかの共同性が現れていることを見いだし，共同性の内容を分類し，その特徴を整理した。⑨原風景の共同性が生成し変容する場の構造について総括的に考察し，仮説を整理した。なお，本研究に関するより詳しいデータ・分析に関しては呉（2001）を参照されたい。

結　果

２次逐語録の形と分析単位

共同語りは，個人の語り（呉，2001，2000；呉・南，1998）とは異なり複数人が語り合うので，語りの話題の変化は個人内の自然な変化というより，やりとりによって生じる変化の方が多いことが，録音テープを聞きながら逐語録を作成する際，うかがわれた。やりとりのなかで話題は変化していくが，ある人から話題があげられるとしばらく同じ話題について語り合っていたので，話題が変わるところをユニットの切れ目にして分類作業を行った。分析単位であるユニットは，どんな所で，何をし，何を感じ，そのことを今どう思うのかを示す，自然な内容のまとまりをなしている。話題の変化でユニットを決めているため１つのユニットの逐語録の量はそれぞれ異なる。ユニットの例をTable 2に示す。

Table 1　共同語り参加者のプロフィール

名前（年齢）	主な居住地と参加者間関係
錦（43歳，男性）	子どもの時は父の転勤のため浦港，仁川，金浦など済州道以外の地域で住んだことがある。小学校２年生から高校３年生まで済州道に住んでいた。大学の時ソウルに移って以来，韓国人の軍人の義務の３年間以外は1998年までソウルに住んでいた。1999年３月に家族連れで済州道に移ってきた。
仁（46歳，女性）	錦の姉。子どものときの状況は錦と同じ。済州道に移動してきたのは小学校６年生の時。それ以来結婚するまでずっと済州道で生活。結婚後（当時27歳）京慶尚南道馬山市で10年くらい生活。1997年済州道に家族連れで引越ししてきた。
殷（42歳，女性）	錦と夫婦関係。ソウル生まれ育ち。大学卒業後２年間地方で職場を持って生活したこと以外はずっとソウル生活。錦と結婚後年２・３回済州道を訪れるが，定住して生活するのは1999年３月に引越ししてきてからである。
永（43歳，男性）	錦と義理の兄弟関係。済州道生まれ育ち。３年間の軍人生活と20代の時プサンでの２年間の職場生活以外は済州道で生活している。錦とは小学校から高校まで同じ学校に通っている。
宣（32歳，女性）	調査者でもある。済州道生まれ育ち。錦と仁の妹。永と夫婦関係。1992年日本に留学にくる前まで大学卒業後１年間ソウルに住んだ以外はずっと済州道で生活。

Table 2　2次逐語録の形態とユニットの例

ユニットの番号・題目	錦 (43, 男性)	仁 (46, 女性)	殷 (42, 女性)	永 (43, 男性)	宣（調査者）(32, 女性)
4．錦さんと仁さんの遊び	④金浦にはあのソリをしてた広い川があるけど，この前行ってみたら小さかった	③経済的余裕がないからね，友達とあまり付き合わなく，家で本読んだり音楽を聴いたりした，記憶に残るのは浦港に住んでいた時くらい，仁川では遊ぶ時間がなかったからね，浦港では海水浴場に歩いて行ったり，今見ると，この前行ってみたらとてもちいちゃいんだって，その時代には ⑤金浦でもソリはよくやった	①陸地での記憶がもっと多くなりそうですね，6年の時済州島に来たから		②そうするとチャオンに行ったりすると
9．遊び行動の範囲	②僕は山川壇まで行ってたよ	⑤われわれが学校に通う時は，沙羅峰，山川壇はそのまま歩いてたよ	⑨沙羅峰はね，今は近いから行けるよ	①その時は，沙羅峰と言った場合，とても遠かったんだ ④もちろん！ボルレを採ったりしたんだ ⑥そうそう，ピンイ採りに行ったりした ⑧もちろん	③山川壇まで！ ⑦だったら，今忠君が一人で沙羅峰に行くとしたら行かせられる？
	⑱省略	⑬省略	⑭⑯省略	⑩⑫⑮⑰⑲省略	⑪省略

注．○の数字はユニット内での発話順番を示す。

共同語りにおける参加タイプとして産出された概念

5人が語り合った逐語録の中に原風景の共同性がどう現れているのかに焦点を当てて検討した。共同で語り合いながら自然な連想のつながりで話題が変わっていったが，その中でどんな立場で語りに参加しているのかといった典型的な参加タイプがあることが見い出された。この参加タイプを「話題提供」「敷衍（ふえん）説明」「受け入れ反応」「確認転回質問」と命名し，概念化の作業を行った（Table 3参照）。Table 4の実例を用いて概念の説明を行う。

話題提供-敷衍（ふえん）説明：ある話題から新しい話題に変えた最初の人を話題提供者，その同じ話題を広げて説明したり，追加したりする人を敷衍説明者とした。しかし，話題提供がなければ敷衍説明は概念上成り立たないので，分析・記述においては話題提供－敷衍説明をセットにして示す。敷衍説明の場合，話題提供者の言葉に対して「そうそう」「うんうん」などあいづちを打ちながら説明に入る場合も多い。Table 4の2つのユニットそれぞれで発言①が話題提供である。ユニット9の場合話題提供で述べた場所に対して発言②はもっと遠い場所を言い，発言④はそれらの場所での活動を述べ，発言⑤はその場所まで歩くのは普通だと言っている。これらの発言②④⑤は最初の話題そのものを広げたり，付け加えたりする説明であるので，「敷衍説明」に分類した。このような「話題提供」「敷衍説明」がセットになって語られている場合，次の4つの特徴があることが見出された。

1）主語の表現の変化：1つのユニットの中で最初の話題提供の場合は「私は」が内容上の主語として語られるが，第2話者，第3話者が受け継いでいく際に主語が「私も」「われわれは」に変わっていく場合が多く見られた（例えば，Table 4のユニット9の発言②⑤）。2）連結：第1話者の未完成な語りを受けついで説明をしていったり，カテゴリーを広げて同じ文脈として説明していく，「連結作業」をする場合があった（例えば，Table 4のユニット16の発言⑤⑥）。3）横取り：話題提供者の語りはまだ終わってないのに，第2者が敷衍説明を始める場合が見られた（例えば，Table 4のユニット16の発言①②）。4）第3者の答え：話題提供者に第2者が質問した時，話題提供者ではなく，第3者が質問に対して答える

Table 3　共同語りへの参加タイプ

参加タイプ		特　　徴	共通反応
話題提供	自分の経験として最初に話題が提示される	・「私は」が文脈上内容の主語になる場合が多い	・笑い 4つの参加タイプに笑いが含まれているが,笑いを促す背景はそれぞれ異なる可能性があり,解釈が必要なので,分析項目には入れず参考程度にする。
敷衍説明	前の語り手の内容に自分の経験を付け加えたり，より広げたり詳しく説明する	・「私も」「われわれは」「私達も」が文脈上の主語になる場合が多くなる ・賛同・同意の表現 ・話題の横取り ・話題の内容を連結	
受け入れ反応	提供された話題に関する受け身的反応を示す	・納得・理解している ・意外・驚く ・聞いた言葉を返して確認・承認	
確認転回質問	相手に具体的に問いかける	・語られた内容のわからない点を質問 ・話題の内容の変化を促す質問	

Table 4　ユニットと分析の例

ユニット	逐　語　録	参加タイプ	分析における補足説明
9．遊び行動の範囲	①その時は沙羅峰と言ったらとても遠かったんだ（永）	話題提供	距離が遠いことを強調している
	②僕は山川壇まで行ったよ（錦）	敷衍説明	もっと距離が遠い所を提示している
	③山川壇まで！（宣）	受け入れ反応	山川壇まで行ったことを聞いてびっくりしている
	④もちろんボルレ（木の実）を採ったりしたんだ（永）	敷衍説明	山川壇での行為を説明している
	⑤われわれが学校に通うときは，沙羅峰，山川壇はそのまま歩いてたよ（仁）……（以下省略）	敷衍説明	主語が「われわれ」になって永さんと錦さんの説明を総合しているかのように表現している
16．ネチャン	①昔はね，あのネチャンがね，とてもね（錦）	話題提供	ネチャンは済州島の地形の特徴を持つ小さい川である
	②沐浴もしたり（永）	敷衍説明	ネチャンでの活動を説明している
	③うん（仁）	受け入れ反応	聞きながら同感を示しているが言葉には表現されてない
	④ネチャンって何？（殷）	確認転回質問	ネチャンは済州島語でネチャン自体が韓国一般の川とは異なるのでそれを知らないソウル出身の殷さんは質問をしている
	⑤川，小さな（宣）	敷衍説明	簡単に答えている
	⑥乾いたネ（川）といって，乾川という済州島は，平常時には，川の底つまりチャンが見えるから，……（永）	敷衍説明	より詳しく，なぜネチャンという名前なのか，実際に地形学的特徴は何なのかを説明している
	⑦だからネチャンと言うんだ！（宣）	受け入れ反応	名前の由来までは知らなかったのでその場で聞いて納得する
	⑧そうそう，また雨が降ったら……（永）	敷衍説明	ネチャンについてさらに説明を加える
	⑨そこでは水の中で遊んだりできるの？（殷）	確認転回質問	まだよく分からない殷さんが質問している
	……（以下省略）		

注.（　）内の説明は筆者が加えたものである。○の数字はユニット内の発話順を示す。

ということが見られた。

受け入れ反応：受け入れ反応は話題提供や敷衍説明に対する同意や納得のような反応である。Table 4のユニット9の発言③とユニット16の発言③⑦がこれに当たる。受け入れ反応にもいくつかの特徴が見られる。

1）順接受け入れ：話題提供－敷衍説明を聞いて，そのまま「うん」と言ったり，「そう」「そうだったんだ」と，そのまま納得・理解しているような反応である。Table 4のユニット16の発言③がこれに当たる。2）逆接受け入れ：1）とは反対に，納得するのではなく，話題の内容に意外性を感じて驚いたり，意外性を示す場合である。Table 4のユニット9の発言③がこれに当たる。3）解釈・評価・意味づけ：話題提供－敷衍説明者ではなく，聞き手になっている者が話題提供－敷衍説明者に聞き返しをして，「お兄さんもいっぱいやったんだね」とか「そんな昔でも塾に行ったんですね」と述べる場合がこれに当たる。話題提供－敷衍説明者に対して，ほめたり，悪口を言ったり，評価したりする場合があった。

確認転回質問：確認転回質問は質問形式の発話を示す。Table 4のユニット16の場合，発言④⑨は質問である。質問形式の発話には大きく3つの異なる意図が見られた。

1）確認質問：話題の内容や言葉自体がわからなくて質問する場合である。例えば，発言④は話題に登場した「ネチャン」という言葉自体がわからないことを示しており，また発言⑨はネチャンの意味は説明を聞いてわかっても，実際にそこで遊ぶことができたのかまだ理解できてない質問である。このように話題の内容がわからないことから質問される確認質問があった。2）拡張質問：内容がわからないというより，内容をもっと詳しく知りたいという意図が見られる場合である。例えば，1つの遊びに関する話題の中で，「お兄ちゃんは一番遠くに行くときはどれくらい時間がかかったの？」と聞く場合である。3）転回質問：わからない，あるいはもっと知りたいというのではなく，間ができた時あるいは一つの話題が続けられた時，話題の転換を求めているような質問である。例えば，ずっと子どもの時の遊びに関する話題が続いたにも関わらず，「お兄さんはソウルに住んでいるとき済州島のことを思い出したりしたの？」と言う場合である。これら背景の意図が異なる3つの質問を，合わせて「確認転回質問」にした。

以上，共同の語り合いに参加するときのタイプとして「話題提供」「敷衍説明」「受け入れ反応」「確認転回質問」の4つを取り上げた。ただし，これら4つ以外に，よく見られた参加の仕方があった。笑いである。具体的な言葉で示されているわけではないが，全員が，あるいは2人以上が笑い出す場合がある。この笑いの反応はそれぞれ文脈によって異なった意味を伴っており，かなり解釈を必要とするので，ここでは「共通反応」として文脈理解のために参考はするが，独立したカテゴリーにはせず，分析は具体的な言葉で表現されている内容で行った。なお本研究では数秒の差で同時発話になる場合は早い順からそのまま言葉にして分析を行っている。

共同語りの中での各参加タイプが果たす機能

共同語りは個人語りのように聞き手と語り手が固定されているわけではない。全員何か話しているという意味では全員が語り手である。また全員他人の話を聞いているので全員が聞き手にも成り得る。しかし，話題の場面（ユニット）ごとに検討した結果，話題が変わるたびに語り手と聞き手が変わっており，それぞれの参加タイプ「話題提供－敷衍説明」「受け入れ反応」「確認転回質問」は，異なる機能を果たしていると考えられた（Figre 2参照）。

話題提供－敷衍説明の機能（共同性の生成）：話題提供－敷衍説明者は語り手となり，自分自身の子どもの時の体験を基に，自分の体験，自分の考え方を述べている。複数人の間でそれぞれの自分自身の語りが交わりながら，「われわれ」の共同性が生成されている。話題提供者が「私は」と発しているのだが，敷衍説明者はまるで自分の話であるかのように「僕も」と言いながら，話題をつなげたり，横取りして説明し，前の話者の話題が自分の場合と同じであることを承認し，「われわれ」という言葉

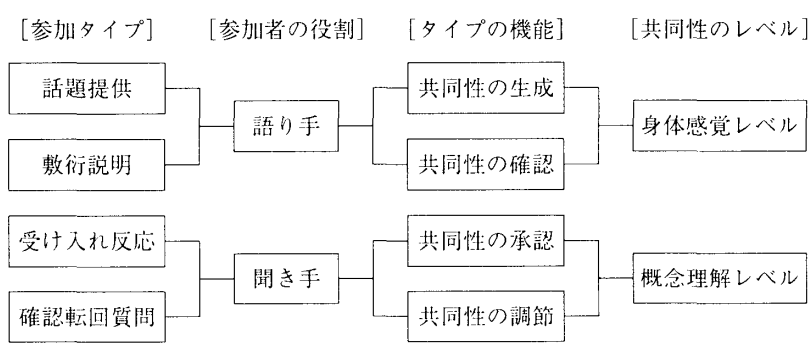


Figure 2　参加タイプの機能

に変化していく。話題が語られ始めた最初から「同じ経験をしたわれわれ」ではなかったであろうが，まるで同じであったかのように話題提供－敷衍説明者は一緒に語りを作り上げていく。この話題提供－敷衍説明者は共同で体験物語を作っている。つまり話題提供－敷衍説明者は，その場面で語り手になり，共同性を生成していると考えられる。

受け入れ反応の機能（共同性の承認・調節）：受け入れ反応者は自分の体験を元に話題を提供したり説明をしているのではなく，提供された話題に対して自分が感じたり，考えたことを口にしている。話題提供－敷衍説明者に対する答えとしての発話である。その意味で，聞き手の役割をとっている。しかし，「うんうん」と納得を示したり「え！」と驚きを示したり，「お兄さんも奨学生をしたんだ。優秀だったね！」とほめ言葉で評価したり，解釈したりしている。これらの「受け入れ反応」は，ただ聞いているだけではなく，話題提供－敷衍説明で生成されている共同性を理解し，承認あるいは否認し，生成される原風景の共同性をその場で共有認識させていく機能を果たしている。つまり受け入れ反応者は聞き手の役割をとりながら，生成された共同性を受け入れ，承認したり，否定して変化させたりしながら共有認識化を調節していると考えられる。

確認転回質問の機能（共同性の承認・調節）：質問するということは，知らない，わからないという意味でもある。質問をする者は話題提供－敷衍説明に直接受け入れ反応をするのではなく，質問をし，「質問者」になっている。そして質問への答えを聞いて「受け入れ反応者」になっていく。つまり，受け入れ反応者と同じく，聞き手の役割をとりながら，生成されていく共同の語りを理解し，承認あるいは否認しながら共有認識化を調節していると考えられる。

話題提供－敷衍説明から把握する済州道の原風景の共同性

以上の分析結果から「話題提供—敷衍説明」がセットになっているところに語り手の同じ空間・風景・場所とまつわる個々人の語りが交わるなかで「われわれの体験」という共同性が生成され，その中で「受け入れ反応」「確認転回質問」を通して，語り手だけではなく，聞き手にも共有認識されていくと言える。ここでは，「話題提供－敷衍説明」が見られたユニットを取り上げ，1）「どんな内容・話題」で「誰」が「話題提供－敷衍説明」に入っているのか，2）「話題提供－敷衍説明」で，内容上の主語の表現がどう変わっているのか，3）共同性として表現される内容は具体的に何なのか，という3点を中心に検討し記述する。

Table 5に「話題提供－敷衍説明」の主な内容と主語の変化および参加者がわかるように整理した。全31個のユニットの中，敷衍説明が見られないユニット1，3，5，22，28，30以外の25個のユニットには何らかの共同性があると捉えられる。

例えば，Table 5のユニット2・6は「済州道以外の地域での話」なので，錦と仁以外の，他地域に住んだことのない人の敷衍説明は見られない。またユニット18・

Table 5　話題提供－敷衍説明への参加と内容的主語の変化

ユニット内容	錦 (43, 男性)	仁 (46, 女性)	殷 (42, 女性)	永 (43, 男性)	宣 (32, 女性)
2. 遊び	私は（済州で）	私は（浦港で）			
6. 遊び	私は（金浦で）	私は（浦港）			
9. 遊び	私は	われわれは		われわれの時は	
10. 遊び・家	私は，あそこは	私は，あそこで		あそこは	あそこは
13. 勉強・受験	私は	われわれの時代は		われわれの学校は	
15. 空間	私は，風景は	風景は		空間は	
18. 勉強・学校	私は，その時は	われわれの先生は	われわれは，勉強は	われわれ，勉強は	
19. 奨学生・学校	私は，その時は	私は，その時は		その時は，私は	
20. 勉強			われわれは	われわれは	
22. 空間			私は		
23. 生活習慣	昔は	昔は，その時は	その時は	その時は	
24. 空間	昔は，あそこは			昔は，あそこは，済州は	
25. 家		あの時あの家では	あの時あの家では		あの家では，私は
27. 仕事	私は	私は		田舎の学生は	私も
31. 家（茅葺）	私達の家は	私達の家は		私達の家も	

注．全部31個のユニットがあるが紙面上一部のみを示した。太い枠で囲まれている部分は，囲まれた所の人が敷衍説明に入っていることを示す。太い枠で囲まれてない部分は，錦・仁・永3人が主に敷衍説明に入っていることを示す。ユニット22は敷衍説明がない。

20・23は殷の参加が目立つ。殷が参加している話題の内容を見ると「小学校・中学校のころの学校生活や勉強スタイル」に関する話題である。またユニット22は，殷が過ごしたソウルの昔の話なので，誰も敷衍説明に入ってない。ソウル出身である殷は同じ韓国一般の時代背景を持って語られた学校の話以外の，済州道の昔の空間・風景の話などには敷衍説明者としては全く参加できていない。

またユニット10・25・27では調査者でもある宣の参加が見られる。その内容は実家での家族の仕事や建物としての家に関する内容である。宣は1960年代の学校風土や済州市内の空間構造に関しては全く敷衍説明者として参加できなかった。

錦は，「私は」という表現が多く，話題提供者としてよく働いている。仁と永は「われわれは」の表現が多く，空間の話題にも，世代の話題にもよく参加していることがわかる。錦，仁，永の3人は同じ世代で小学校時代から高校まで同じ済州市に住んでいたのでこの3人はどの話題にも「話題提供－敷衍説明」者として参加できている。

以上のことから，参加者それぞれの背景が異なり，各参加者は，ある特定の話題にしか敷衍説明者として参加していないことが明らかになった。同じ「われわれ」という表現を用いた語りでも，それぞれのユニットで内容はそれぞれ異なり，ある地域，空間，風景の特徴を共有する言葉であったり，同じ世代としての同じ時代背景を基にした文化に関する共有であったり，一家族としての面白いエピソードの共有であったりと様々であった。

敷衍説明に参加している参加者と語られる内容の検討の結果，大きく「済州道以外の他地域性」「1950・1960年代の世代性（同時代性）」「済州道の地域性を前提にする世代・遊び，空間・風景性，世代・学校性，家族性」などが共同性として現れた（Table 6参照）。さらに，同じ済州道の特性でありながらも世代によって空間・風景・場所自体が変わっていたり，遊びや仕事などを中心に生活文化が異なっていたりすることが示された。

以上の検討で，済州島出身でない殷は，済州島の特性と関係ある話題には敷衍説明者として参加する回数が最も少なかった。これらから，生成される原風景の共同性を共有していく場合，風景・空間に対する固有名詞が理解でき，また固有名詞を一般名詞に広げて理解でき，同じカテゴリーの別の固有名詞を提示できることが必要条件であると考えられれる。

考　察

本研究では，家族グループの共同語りを通して，原風景の共同性に焦点をあてて検討してきた。その結果，1）共同語りに参加する際のいくつかの典型的な参加タイプがあり，それらを「話題提供－敷衍説明」，「受け入れ反応」，「確認転回質問」と名付け，これらの参加タイプは，語りの中で共同性の生成・調節・承認という異なる機能を果たしていることを示した。2）また，「話題提供－敷衍説明」が見られるユニットを中心に検討し，生成される共同性の背景には「地域の特有の空間，風景，場所」，「地域での子どもの遊び，学校生活」，「地域の時代背景による共通性，世代性」などがあることを示し，地域で通用する固有名詞・一般名詞，方言・標準語の使われ方を理解することが重要な手がかりであることを述べた。

これらの結果を総合的に捉え，ここでは，1）一つの地域における原風景の共同性が生成・変容していくプロセス・その場の構造について考察し，2）本研究の結果・考察から得られた仮説を提示し，3）原風景を共同で語ることの意義および今後の課題を示す。

原風景の共同性が生成・変容する場の構造について

共同語りの検討から，最初は個人の原風景として個人の経験として語られた内容が，「われわれはよくそこまで行ったなぁ」と敷衍説明をする他者によって承認されたり，「あ，そうだったんだ，お兄さんもいっぱいやったんだ」と他者の「受け入れ反応」によって意味づけられたり評価されることがみられた。つまり「私」の語りが他人によってストーリーがつなげられ，意味づけられ，その場で共有され，私の原風景ではなく「われわれの原風景」として変化して行ったと思われる。評価・意味づけにおいても「われわれは○○だったのに」，「昔は○○だったのに」の対になる関係で「今は△△だ」，「今の子ども達は△△だ」という方向で語られる場合が多かった。個人の体験として語り始められたものが，個人のアイデンティティとして方向づけられなくなるとも言える。このような原風景を共同で語る場での共同性の生成と変化の現れの構造はFigure 3の上部のように考えられる。

Figure 3の上部に示しているように「私の原風景」が交じり合い「われわれの原風景」に変容し，「われわれの原風景」との比較対象として「今の子ども達」の評価が見られた。このような「私」から「われわれ」への主語の変容は，話題提供－敷衍説明で見られ，受け入れ反応と確認転回質問で「われわれ」が調節されながら共有認識をより深化していくと思われる。

原風景を共同で語ることは，同じ地域の場所・空間・風景と関係する多様な人，遊び，出来事が交わりながら，共同でストーリーを構成し，そして共有認識し，共同で評価し，意味づけていく，語り合うその場での共同の物語生成作業であると考えられる。このような作業は日常的生活の中で何気なく行われ，その場その場で「われわれ」という共同のアイデンティティ，「われわれの

Table 6　共同性の種類と内容

共同性の種類		「話題－敷衍説明」から見られる共同性の内容			分析における補足説明
		主な参加者	語られた内容の要約		
他地域性（京機,仁川,浦港,金浦）		錦仁	他地域での遊びと子どもの特徴	ソリ遊び，ジブルノリなどをした，地域毎に男女区別意識が異なる。	・気候・地形の違いからくる遊びの違いが見られる。 ・他地域での遊びは標準語だけを用いている。
世代性（1950年代生まれ,1960年代を児童期･青年期として過ごした世代）		錦仁 永殷	1960年代の勉強･受験の事情	その時，われわれは，まる暗記の勉強をした，入試制度が厳しかった，参考書などはあまりなかったが勉強の質は高かった。	・学校制度や教科書の内容，入試制度は全国統一されていることから殷も敷衍説明に入っている。 ・韓国の経済・文化的背景の同一性からくる学習参考書，読書環境などの共通性が見られる。
済州島の地域性	世代性（遊び）	錦永仁	同じ町で同じ遊び	沙羅峰で洞窟探検，ボレギカクでボマル捕りや水泳，オラネチャン，山川壇などでピンイを採ったり，2・3時間歩いて遊びに行った。	・3人はその当時遊び仲間ではないが，特定の遊び場の固有名詞を用いて，遊び文化を共有している。まだ都市開発があまり進んでなく，外での集団遊びが中心になっていたため遊び場や遊び名，習慣などの共有ができていることが見られる。
	世代性（空間性）	錦永仁	同じ町の空間･風景	昔は空き地，ドルパンが多かった，山地川などもあったし，石垣やモクスルの木とかも思い出す。	・道の並木，囲いの材料・素材，家にある木の種類など都市開発と関係して変わったり，なくなったりしてきた物に対する発言が多い。今は都市化が進んで空間がかなり変わっているが3人で昔の空間構造を繋ぎ合わせながら説明をしている，空間名は固有名がよく見られる。
	世代性（学校）	錦永仁	同じ町の同じ学校の中での文化	ヒョン先生の組は朝4時から学校に行った，ザさんと一緒に給食用のカマギドク（パン類）を盗んだりした。	・学校での生活や受験の話も含まれるが，韓国一般の特徴としてではなく，特定の学校での具体的なエピソードが述べられている。特定の人名がよく出ている。特定の人名も3人は共通している。
	家族性（家の空間）	錦仁宣	同じ家での空間構造の特徴,家族の特徴	昔の茅葺きの家の時は今とは空間配置が違う,お祖父さんは裏庭にお酒を隠したりしていた。	・今はなくなっている茅葺き屋根の家への追憶やその当時の空間構造や家族の様子が述べられた。家族だけが知っている地名や空間名が使われる。

所」という共同の場所アイデンティティが少しずつ変容しながら現れる。最初から「われわれ」の原風景ではなく，それぞれの「私」の原風景が交じりながらわれわれの原風景になっていく。このような同じ地域で空間・風景・場所とまつわる体験を根拠にした地域の土地に基づく「われわれ」という共同のアイデンティティが生成され共有されていくなかに原風景の共同性があるということ自体が，原風景を共同で語り合うことの持つ心理的機能ではないかと考えられる。

また，同じ地域の人同士でも，場所・空間名を一般名詞で表現したとき敷衍説明が見られるのか，固有名詞で表現したとき敷衍説明が見られるのかによって，生成され共有認識化する共同性のレベルが異なると考えられる。

つまりFigure 3の上部は，共同性の生成と変化が現れる場の構造を示しており，下部は，その構造の中で行われる中身として，言語表現が固有名詞か一般名詞かによる共同性の深化のレベルの違いを示している。すなわち，これは共同の原風景語りの中に生成されてくる「われわれ感を伴う共同性」のレベルの差を示す。

本研究の結果・考察から得られた仮説

ここでこれまで得られた結果・考察から再なる仮説が生成された。

仮説1）原風景の共同性は，語りの中で共同作業をし，ストーリーを構成していく「われわれ感」が伴う共同の物語りとして現れる。

仮説2）共同語りへの参加は異なる参加タイプがあり（「話題提供－敷衍説明」「受け入れ反応」「確認転回質問」），各参加タイプにはそれぞれ異なる機能（共同性の生成，調節，承認）を果たす。

仮説3）原風景の共同性は「話題提供－敷衍説明」で生成される。共同語りにおける話題提供－敷衍説明を用

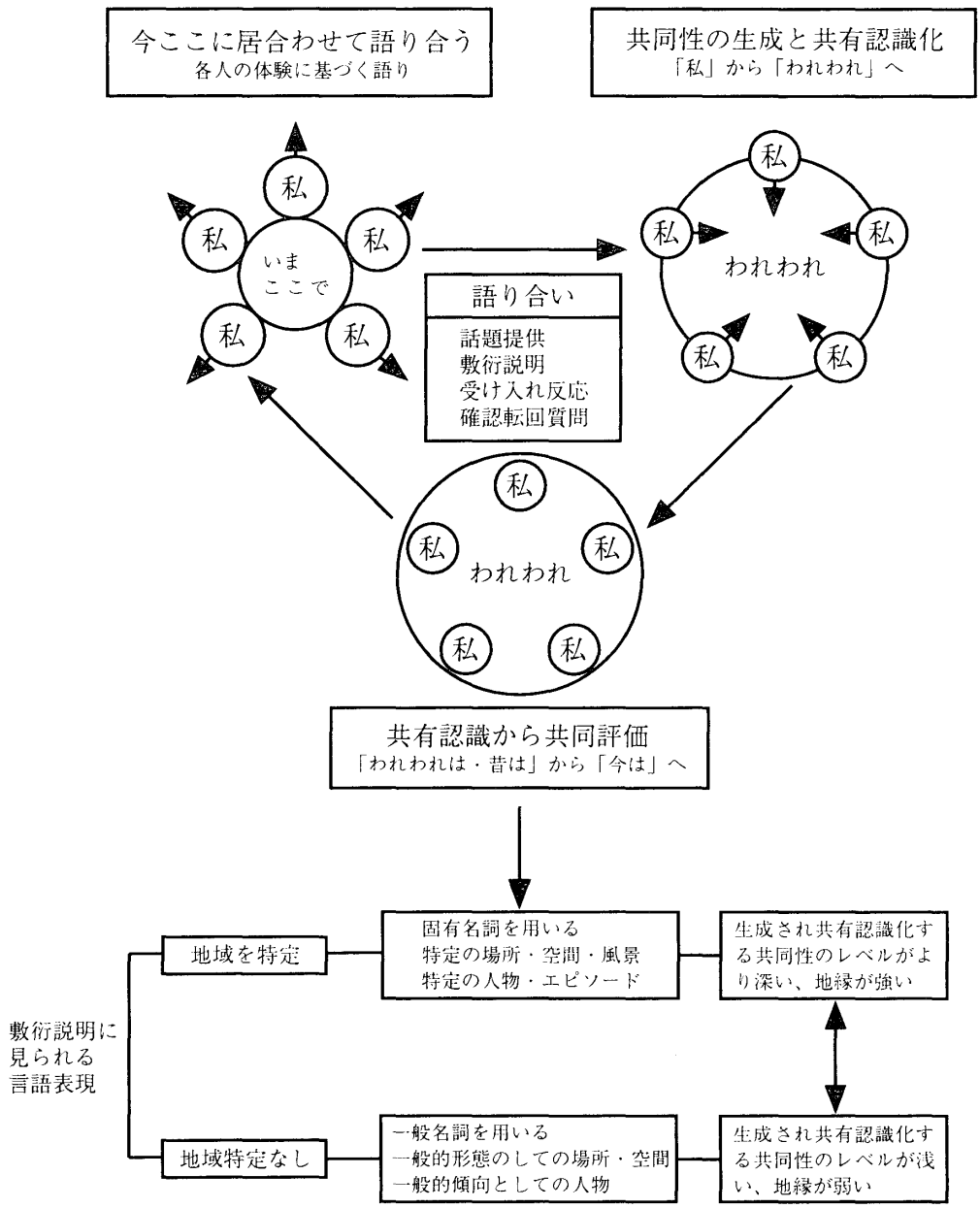


Figure 3　共同語りにおける共同性の生成変化と共同性のレベル

いて，生成された共同性の内容・共同性のレベルが分かる。

仮説4）私からわれわれに変化する敷衍説明が多く見られるほど，共同性の生成が多く見られ，特に共同性を表す言語表現を固有名詞で示す場合，生成され共有される共同性の深度が高い（具体的である）。

仮説5）原風景を共同で語るということには，共同で地域アイデンティティ，場所アイデンティティを生成し共有するという心理的機能がある。

原風景を共同で語ることの意義

以上の結果・考察から示唆されることについて考えてみる。最近，共同体の喪失，原風景の喪失ということがよく言われる。それは，空間・風景・場所がなくなっているからだけではなく，語り合い自体がなくなり，私の物語り・私たちの物語りが生成されないということのほうが，むしろ大きな問題ではないかと，本研究の分析過程で共同性が生成される過程をみながら筆者らはに推察された。

近年，日本においては，観光地だけはなく，どの地域でも地域のアイデンティティを表すためのまちづくりや

景観デザインなどに力を入れているが，そのとき「原風景」という言葉がよく取り上げられている。しかし，ほとんどの場合，空間・風景・場所という物理的に固定されたモノとして原風景を探そうとしているのではないか。

参加型まちづくり，参加型環境教育，参加型○○運動など，参加に意味を与えようとする動きはたくさんあるが，その参加のなかで何をすればいいのだろうか。ただ単に共通性を求めるのではなく，あるいは特別な一人がつくる地域物語りではなく，空間・風景・場所にまつわる体験を共同でつなぎ合わせ語り合うなかで，私たちの物語りを生成し，共有しながら受け継がれていくようにすることがまず大切なのではないかと考えられる。その過程において住民一人一人が「われわれの原風景」という地域に基づく住民共同のアイデンティティをもつのだと思われる。すなわち，原風景を共同で語り合うことは，等身大の場所から，自分の生活との関わりの中から「小さな物語り」を発見し地域・土地に基づいて（嘉田，1997）共同性をみていくための一つの手法として考えられるのではないだろうか。

梅野（1998）は，民俗社会の空間は，地名によって細かく分節され，人々に認識されると述べ，ある場所にまつわる出来事の記憶が個人だけではなく，多くの人に共有されるとした。共同体はバラバラの個人にすぎず，言葉により伝達しなければ，記憶を共有することはできないし，記憶を保持するためには，共有された記憶のための契機が必要であると強調している。また，臨床心理学の下山（2000）は，物語生成の基本には，他者との間での共同生成が常に存在し，人が語り合いの場に参加し，そこで互いに物語を語り合い，共有することで，個々人の物語とその場の物語が連動し，個人の物語が社会的物語として展開していくと述べながら，村落共同体の物語りを共同生成する場が失われつつあることを指摘した。

梅野や下山の言及が示唆することは，本研究の共同性の生成と変容過程をみることから示唆される点と相通じると思われる。

本論文で語りに参加するタイプと語りに用いられる言葉（一般名詞・固有名詞，標準語・方言）によって見られる共同性のレベルが異なる事が示唆された。これは，参加型まちづくりや参加型環境教育などをするとき，手助けをするファシリテータ（Hart，1997）になる者にとって，地域住民との語り合い・調査・ワークショップなどで現れる言葉とその背景の構造を見分けることが重要な作業の一つにもなることが示唆できる。

今後の課題

本研究では「原風景」「共同語り」というキーワードを用いて「共同性」に焦点をあてて検討してきたが，いくつかの課題が残されている。

まず，「原風景」という言葉を用いているが，語られた内容自体に関して細かく原風景か否かを同定する作業をしたわけではない。つまり，遊び体験語り・思い出語りではないかという問いが考えられる。これに関しては，風景・空間・場所にまつわる体験が場所アイデンティティ・地域性と関係してくるという筆者の視点を入れて原風景として捉えた。語られる内容が原風景かどうか同定することがそもそも可能なのかも含み，今後検討が必要であると考える。

また，本研究の結果で示した，共同性を説明する概念「話題提供－敷衍説明」「受け入れ反応」「確認転回質問」，そして，これらが働くなかでみられる「共同性の生成・調節・承認」という機能，私の物語りからわれわれの物語りに生成・変容していくプロセスは，「原風景語り」ではなくどんな語りでもあり得るのではないか，あるいは原風景というテーマはこのようなプロセスになりやすいかという問いがあげられる。これらの問いに関しては，今後語りの研究・原風景研究を幅広く重ねていく中で明らかにしていく必要があると思われる。今の段階で経験的に考えられるのは，参加タイプとその機能は他の内容の共同語りにもみられると思われる。ただし，本研究では語りの中に用いられる言葉の内容（一般名詞・固有名詞の地名・場所名，標準語・方言で表現される地元の特徴）が原風景と関わってくるのではないかと思われる。また本研究においては，「私」から「われわれ」への生成・変容がみられた。各場面ごとにわれわれに含まれる参加者が異なったり，われわれと認識する内容も世代性だったり遊び体験だったりと異なるが，この異なる内容も共有していく原風景を共有するわれわれであり，敵対的関係はみられなかった。同じ地域に基盤を置いた話をする場面でも，何かを決める場面になると（例えば，まちづくりの会議）対立する敵対的関係の異なるわれわれが現れるかもしれない。この点に関しては今後実践面における研究を重ねていくなかで検討が求められる。

文　献

Hart. R. (1997). *Children's participation : The theory and practice of involving young citizens in community development and environmental care.* London : Earthscan Publications Ltd.

嘉田由紀子　(1997)　都市化にともなう環境認識の変遷－映像による「小さな物語り」－　福井勝義（編）岩波講座文化人類学第２巻　環境の人類誌　第１部人間は環境をどのように把握するのか（pp41-76）　東京：岩波書店

勝原文雄　(1979)　農の美学．東京：論創社

勝原文雄　(1986)　村の美学：原風景と修景の座標　東

京：論創社
箕浦康子（編）（1999）フィールドワークの技法と実際：マイクロエスノグラフィー入門　京都：ミネルヴァ書房
野中　卓・桜井　厚（編）（1995）ライフヒストリーの社会学　東京：弘文堂
奥野健男（1972）文学における原風景　東京：集英社
呉　宣児・南　博文（1998）語りから見る原風景（1）－個人内の原風景：語りの種類と語りタイプ－　九州大学教育学部紀要（教育心理部門），第**42**巻第2号，93-104.
呉　宣児・南　博文（1999）原風景研究の動向と展望　九州大学教育学部紀要（教育心理部門），第**43**巻第2号，125-140.
呉　宣児・南　博文（2000）語りから見る原風景（2）－韓国済州島の空間的特性を中心に－　九州大学心理学研究　第**1**巻　創刊号，123-137.
呉　宣児（2000）語りから見る原風景：語りの種類と語りタイプ　発達心理学研究 **11**（2），132-145.
呉　宣児（2001）語りからみる原風景－心理学からのアプローチ　東京：萌文社
Proshansky, H. M. & Fabian, A. K. (1987). The Development of Place Identity in the Child. In Weinstein, C. S., David T. G. (Ed.)、*Spaces for children:The built environment and child development*. New York and London: Plenum Press.
桜井　厚（1986）主観的リアリティとしてのライフ・ヒストリー中京大学社会学部紀要，73-110.
佐々木正人（1992）想起のフィールド　東京：新曜社
佐藤郁哉（1992）フィールドワーク：書を持って街へ出よう　東京：新曜社
下山晴彦（2000）心理臨床の基礎1　心理臨床の発想と実践　岩波書店
高橋義孝（1978）原光景と原風景　思想，**653**，27-35.
梅野光興（1998）場所と出来事　小松和彦・香月洋一郎（編）講座日本の民族学2　身体と心性の民俗Ⅳ　記憶のなかの民俗（pp. 207-224）雄山閣
山田洋子（1986）モデル構成をめざす現場心理学の方法論　愛知淑徳短期大学研究紀要第**25**号，31-50.
やまだようこ（編）（1997）現場心理学の発想　東京：新曜社
やまだようこ（1999）喪失と生成のライフストーリ　発達　**79**，2-10.
やまだようこ（2000）人生を物語る－生成のライフストーリー　京都：ミネルヴァ書房

付　記

本論文は，2000年九州大学大学院人間環境学研究科に提出された，呉　宣児の博士論文及び，それを出版化した『語りから見る原風景－心理学からのアプローチ』（萌文社，2001）に載せられた内容のうち，共同語りについての一部を，再構成し作成したものである。